相模福祉村
新春恒例
「福祉」対談

「家庭に代わる子どもたちの家」

―児童養護施設― 2人があり方を語り合う

赤間源太郎理事長
×
丹清所長
（中心子どもの家）

「おはよう」で始まり、朝食や歯磨きの後に登校する。放課後はクラブ活動や友だちとの遊び、宿題や読書、アルバイトなどをして過ごす。夕食を楽しみ「おやすみ」と布団に入る。そんな家庭の日常の風景が、児童養護施設でも流れている―。児童養護施設は厚生労働省の管轄で全国に配置されており、相模原市にも現在、中央区と南区に施設がある。そのような中、この春、緑区にも新しい施設ができあがる。社会福祉法人相模福祉村（中央区田名）が運営する「メレ・オハナ」（緑区原宿南）だ。今回は同法人の赤間源太郎理事長と、すでに施設を展開している社会福祉法人中心会（海老名市／浦野正男理事長）による「中心子どもの家」（中央区田名）の丹清所長に、施設のあり方、役割、課題などを聞いた（敬称略）。

子どもたちの「ふつう」の生活を支援

今春緑区に新施設 相模福祉村が運営

家をつくりたい

「児童養護施設」は、家庭での様々な事情から保護・養育を必要とする概ね2歳から18歳の子どもたちを対象とし、全国で約2万5000人が暮らしている。

相模福祉村の施設「青い鳥」で取材に応じた丹所長（右）と赤間理事長

―まずはそれぞれの法人の沿革を教えてください。

丹　私たちの法人自体は児童福祉法制定（1947年）とほぼ同時期、戦後まもなくに児童養護施設として海老名でスタートしました。1998年に相模原へ移し、中央区田名に「中心子どもの家」として開所。2014年には南区新戸に「相模原南児童ホーム」を開きました。

赤間　相模福祉村は1983年に障がい者支援を始めたのがきっかけです。以後、高齢者福祉、保育、児童支援など、多様な福祉サービスを提供してきました。そのような中、7年ほど前から児童相談所から一時的に子どもを預かる支援を行っています。それから生活の連続性を保てる「家」をつくりたいと考えるようになり、それが「メレ・オハナ」につながっていきます。

相模福祉村「メレ・オハナ」（今春開所）

予想外現場に衝撃

―赤間理事長の法人では児童養護施設は今回が初めてとなりますが、丹所長はいつから携わっていらっしゃいますか。

丹　私自身はもともと別の業界におり、福祉の学校を卒業したわけでもありません。たまたま「社会福祉の父」と言われる糸賀一雄さんの本を読んで福祉に関心を持つようになりました。そのような中、児童養護施設の求人広告を見て見学に行ったところ、そこは私のイメージとまったく違ったのです。当初は「体の不自由な子の施設かな」と思っていたのですが、行ってみるとみんな元気に走り回っている。聞いたところ、「ここは親と一緒に生活できない子が暮らす施設です」と。「親と暮らせない子が存在するのか」とその時知り、衝撃を受けました。それから30年近く現場に携わってきました。

家族の喜び支える

―では、それぞれの法人の理念について教えてください。

丹　「〝あなたがいてくれてよかった〟と思える街づくり」を掲げています。介護の現場でも子育ての現場でも、本来は互いに慈しみ合うはずの家族関係が、介護負担や育児負担によって押しつぶされてしまうことがあります。そうしたときに、社会福祉法人として負担を軽減するだけでなく、「この親のもとに生まれてよかった」「この子を産んでよかった」と家族が心から思えるように支えること。その家族の喜びを支える法人でありたいと考えています。

赤間　私たちは「相模福祉村を『わが街の文化』に！」というスローガンを掲げています。福祉を特別な「サービス」や「施し」としてではなく、地域の日常生活の一部として自然にあるもの―。つまり「地域の文化」として根づかせることがミッションです。

気持ちだけでは

―一方、施設運営で抱えている課題について。

丹　「人材の確保」と「定着」です。それがなければ、子どもたちへの支援の質も、親御さんへの支援の充実も実現しません。現場の職員は本当に一生懸命やってくれています。ただ、できるだけ職員の入れ替わりが少なくなるようにするには、国の職員配置基準そのものをもっと引き上げていかなければいけないと感じています。以前、当事者の方に話を聞く機会があり、「施設生活で一番つらかったことは何か」という問いに対して、「担当の職員がコロコロ変わること」という回答でした。

中心会「中心子どもの家」

―担当が変わるたびに、また一から人間関係を作り直さなければいけない。当事者にとって、これは本当に大変なことですね。

中心会「相模原南児童ホーム」

赤間　うちの法人は600人ほどのスタッフを抱えていますが、どの施設でも「人を支援する」業務なので、一人ひとりの職員をどう丁寧に育てるか、常に力を入れています。専門知識や制度ももちろん大事ですが、その前提として「人間性」や「思い」「情熱」、つまり「福祉マインド」がないと続かない仕事だとも感じています。

「心の安心安全を」「地域の中で」

丹　ただ、この30年で児童養護の専門性が大きく進展しました。臨床心理士の配置が制度化され、外部研修やスーパービジョンを通じて理論的・科学的な支援方法が取り入れられるようになってきた。かつては、いわゆる気合と根性で何とかしていた部分が正直ありました。でも今は、それだけでは通用しないし、通用させてはいけない。福祉のマインドや情熱は欠かせないが、それだけに頼っていては職員が疲弊してしまう。制度・体制・研修の三つを、現実的なレベルで整えていくことが求められていると思います。

社会的養護の必要性

―この30年で、ほかに感じる変化はありますか。

丹　当時、児童養護施設に入所する理由の多くは、両親の離婚などの家庭事情でした。兄弟がいる場合は兄弟全員が入所するケースがほとんどでした。一方、今は虐待による入所が最も多い。その中で、自分だけが施設で暮らしていて、兄弟は親元にいるというケースも増えています。すると「なぜ自分だけが施設なのか」という問いを抱え、自尊感情が下がりやすい状況にある子が多いと感じます。虐待の内容も、かつてイメージされていた「殴る・蹴る」といった身体的虐待だけでなく、ネグレクトや心理的虐待が多くなっています。

―福祉マインドの話に戻ります。丹所長は福祉村の取り組みで感心している点があると伺いました。

丹　はい。私は地域の一人として自転車で福祉村さんの施設の近くを通ることがあるのですが、そのときに職員さんは、私が同業者だとは知らないはずなのに、きちんとあいさつしてくれるんです。お互い顔は知らないのに、すごく気持ちの良いあいさつをしていただきました。これは簡単そうでいて、一番難しいことだと思います。

赤間　ありがとうございます。うちは地域の交差点などで、毎朝職員が一緒にごみ拾いをしています。誰に見せるでもなくやっていますが、結果として地域の方とのあいさつが自然に増えて、「敷居の低い施設」になっていればいいなと思っています。

30年以上児童養護に携わる丹所長

丹　我々も地域の夏祭りの準備や片付けを手伝ったり、大学生のボランティアの方に来ていただいたりしています。相模原への移転当初、施設建設に対する大きな反対運動もなく、地域の方が温かく迎え入れてくれました。本当に感謝しています。

市の姿勢に感銘

―相模原市行政の福祉に対する考えはいかがでしょうか。

丹　相模原市の児童福祉行政は、私はかなり頑張ってくれていると思っています。これは市民の皆さんにもぜひ知っていただきたいのですが、一時保護されている子どもたちが、自分の通っている小学校や中学校へそのまま通い続けられるように、相模原市は昨年の夏からタクシー送迎を制度として整えてくれました。

全国的な調査では、一時保護中に自分の学校へ通えている子どもは6％と言われています。人数だけ見れば、市内の一時保護児童は人口規模からすればわずかですが、その「わずか」にしっかり焦点を当てて制度を作ってくれた。これは、相模原市が児童福祉に本気で取り組もうとしている姿勢の表れだと思っています。

相模原市の福祉をリードする赤間理事長。相模福祉村は相模原市に根ざし、「障がい」「高齢」「保育・児童」の3領域における福祉事業を中心に、地域の声に応える公益性の高い福祉活動を行っている。80を超える施設を運営するなか、この春には初めて「児童養護」の領域に支援を広げ、緑区に「メレ・オハナ」を開所する。

力合わせて

―では、最後に市民の方へのメッセージをお願いします。

丹　私たちが一番大切にしている価値観は「安心・安全」であることです。ここでいう「安心・安全」は単に物理的な危険がないという意味だけではありません。自分の思っていることを言葉にしてもいい、嫌なことは嫌と言ってもいい、弱さや本音を出してもいい。そういう「心の安心・安全」がある場所であることです。猫が安心しておなかを見せて寝転がるように、子どもたちが「素の自分」を出せる場所でありたい。今後も「あなたがいてくれてよかった」と思い合える地域を、相模福祉村をはじめ、行政と市民、子どもたちと職員、みんなで一緒につくっていけたらと思っています。

赤間　メレ・オハナでは、子どもたちが「ここが自分の居場所だ」と思える家づくりを目指しています。長年、児童養護の現場を支えてこられた丹さんのお話からも、多くの学びと励ましをいただきました。地域の皆さまとともに、子どもたちの未来を支える「開かれた場」であり続けたい。「この街で育ってよかった」と思える環境を、力を合わせてつくってまいります。

社会福祉法人
相模福祉村
1983年創立
☎042-761-7788
相模原市中央区田名6769番地
地元で一番愛される法人を目指し努めてまいります!!
地域貢献集団
もう大丈夫！
何故って？私が来た!!
相模福祉村